

横井小楠の「感懷」詩について

野口 宗 親

はじめに

「小楠先生は詩人でない、されど先生を知らんと欲せば、其詩を読むに如くはなし。先生の詩は、実に先生の心の声である、先生の最も深き胸臆の底にある、琴線より発する音楽である。」これは徳富蘇峰が自ら小楠の漢詩の草稿本『小楠堂詩草』を影印出版した際、跋文において述べた言葉である。確かに小楠は政治家・思想家（儒学者）であって「詩人」ではない。事実、彼の詩は典故や語の彫琢・韻律にあまり関心がはられず、時に和習もあり、技巧面で言えば必ずしもレベルの高い詩ではない。

しかし技巧的な詩は小楠の目指すところではなかった。彼自身「書に云う詩は以て志を言う」と（「感懷十首」の序。『書経』舜典より）、「要は皆平生の意を写して鍊琢を為すに及ばず」（『沼山閑居雜詩』の小引）と述べている。中国古来の詩のあり方が「志を言う」ものとすれば、彼の詩はある時期から読む人に自分の素直な思いや感情が伝わればそれでよいと開き直った所がある。「蓋し詩は聖凡賢愚の別無し。性情の已む可からざるに発すればこれ真詩」なのである。それは藩校時習館の字義章句の細かい解釈に浮き身をついやす学風に反旗をひるがえした小楠としては当然の方向であろう。ここに小楠の詩の不思議な魅力がある。彼の詩の特徴は、性格と同様「明快」「暢達」であり、平易な表現や彼自身の言葉を通して、その時々「心の声」がストレートに伝わってくる。

小楠の詩で残っているのは、およそ二百五十首。天保六年頃（一八三五・二十七八）から暗殺の前年明治元年（一八六八・六十歳）までの詩が現存する。漢文による文章は晩年に書かなくなったが、詩だけは断続的に生涯にわたって詠み続けた。

彼の詩はおおまかに三つに分かれる。一つは、旅や転居から生まれた詩で

ある。環境が変わると人は新しい見聞から刺激を受け、記録に留めたい、他人に伝えたいという衝動に駆られる。小楠最初の漢詩集『東游小稿』が生まれたのは、天保十年（一八三九）の江戸遊学における道中の見聞や江戸での出来事を詩に詠もうという動機からである。江戸から帰ってから晩年までの詩を集めた『小楠堂詩草』では、安政五年（一八五八）福井に招かれて熊本を出立してから、文久三年（一八六三）福井藩挙藩上洛失敗で熊本へ帰るまでのわずか五年間に詠まれた詩が半数近く（約六十首）を占める。この間の経験が小楠にとっていかに刺激的で重要であったかを物語る。

二つは、友人・知人や弟子達との交情などを詠んだ詩である。小楠には特定の詩友・読者が少なからずいた。詩会に参加していたことは、「課題」の詩があることでわかるし、城野静軒や元田永孚は常に詩を応酬し、和韻する詩友であった。弟子（池辺藤左衛門・内藤泰吉・江口純三郎ら）や彼を訪ねて来る若者に励ましや自分の信念を詩に詠んで贈っている。また頼まれると気軽にその場で作った詩や気に入った詩を揮毫している。福井でも笠原白翁・鴻雪爪・長谷部恕連らは詩友であり、交情や折々の気持ちを詠み、詩を応酬した。小楠にとって詩はコミュニケーション上大切な道具であった。

三つは、政治的・思想的な感慨、時には抑えがたい感情を詠んだ詩である。「感懷」「偶作」「偶成」「偶興」「寓言」「雜詩」「雜感」「讀二典」などと題する詩群である。特に中年以降の彼はこのような詩によって率直に自分を語り、人生を語り、思想や政治を語っている。詩は自己表現の一つであった。晩年に彼が自分の詩稿『小楠堂詩草』を整理した際、推敲・改削の跡が著しいのは大部分これらの詩である。小楠がいかに重要に思っていたかがわかる。小楠の思想を知るのにこれらの詩の分析は欠かせない。

本稿では、三つめの詩に属し、『小楠堂詩草』の初めに見える「感懷」と題する詩について若干の考察を加えてみたい。小楠について感懷詩といえ、江戸遊学から帰国後の朱子学への傾倒などを詠んだ「感懷十首」（弘化二年（一八四五）四月序。のち改削）が有名である。しかし、『小楠堂詩草』には、それに先だって同題の「感懷二首」（天保十四年（一八四三）秋）が置かれている。『小楠堂詩草』で「感懷」と題する詩はこの二つだけである。両詩は制作時期も近く、なんらかの関係があると見られる。

両詩が詠まれた時期は、天保十一年（一八四〇）酒失による江戸遊学からの帰国以降、学問修行（陽明学から朱子学へ）、実学派^⑥の結成、弟子の養成など小楠思想の最初の転換期にあたる。ところがこの時期、彼の著作として残されている資料は若干の書簡や政策提言書「時務策」以外ほとんどない。従って、この時期詠まれた漢詩（「感懷」詩など）や漢文文章（「南朝史稿」や「題見聞私記後」）は初期小楠の感情や思想を直接知るのに貴重な資料である。しかし、従来は漢文という制約・制作時期の不詳の問題などから、小楠研究の中で十分に生かされてきたとは言いがたい。

そこで本稿では二つの「感懷」詩の内容や意義を考察し、それと関連して、とりわけ小楠の後の政治思想の基本となる、

・其他俄羅斯（オロシヤ）を初各国多くは文武の学校は勿論病院・幼院・
啞聾院等を受け、政教悉く倫理によつて生民の爲にするに急ならざるは
なし、殆三代の治教に符合するに至る。（万延元年（一八六〇）「国是三
論」、傍線は筆者。以下同じ）

・人君愛民の道は是又専ら民を氣に付けて、民の便利をはかり世話致す事
に候。（元治元年（一八六四）「沼山對話」）

・方今若三十万石以上の人に其人を得て、三代の治道を講じて西洋の技術
を得て皇国を一新し西洋に普及せば、世界の人情に通じて終に戦争を止
むることいかにも成る可なり。（慶応元年（一八六五）「沼山閑話」）
などに見える、政治は誰のため―「民のため」、どのように（何を目標に）―
「堯舜」三代「夏殷周代」の治教（道）のようになつたかについて考察
またいかにして小楠に強く意識・自覚されるようになったのかについて考察
してみたい。

I 『小楠堂詩草』と「感懷」詩

詩の考察に入る前に「感懷」詩が収録される『小楠堂詩草』の性格について考察し、「感懷」詩の詠まれた時期や背景を概観しておきたい。

『小楠堂詩草』は天保十一年（一八四〇）三十二歳（江戸遊学から酒失帰国した年）から、元治元年（一八六四）五十六歳（福井藩挙藩上洛中止により帰国した翌年）までの作、合計百三十一首を収録。詩の配列は編年で、塗

改が多く施されている。作詩した当時と現在（塗改時）とで思想が大きく変化したものを改訂・削除（感懷十首・沼山閑居雜詩・読二典・寓言など）、個人的感情的なものを削除（秋夜雜感（兄の死を悼む））したのは、恐らく他人に読まれることを意識してのものと考えられる。

また、特徴的なのは小楠自身が重要な詩の題の上（欄外）に筆で丸印（○）を付していることである。福井藩招聘（安政五年）までの前半部分の目録をあげ、丸印が付されている詩を見てみる。

『小楠堂詩草』目録（塗改文による）

- 1 送橋爪子共到菊池賦別 此日秋尽（天保十一年（一八四〇）秋）
- 2 擬唐人岳陽樓詩 水明樓課題
- 3 題竹内宿欄像
- 4 洗風堂上与阿蘇大宮司 還山吟 課題
- 5 題月兔図
- 6 謁堀大夫墓 *宝曆の治の立役者堀平太左衛門の墓に詣で、細川重賢の拔擢を詠む。
- 7 題月兔図
- 8・9 感懷（二首）（天保十四年秋） *実学派興起。「修己治人」を詠む。
- 10・11 偶作（二首） *熊沢蕃山（「集義一条途」）などを詠む。
- 12 答阿蘇大宮司 13 観山水図有所感而作
- 14・15 送池辺熊蔵帰柳川 *朱子学への傾倒。徂徠学・陽明学批判。
- 16 舟望河内湾
- 17・22 漁父某携六排屏風來、需吾書、欣然賦六絶句揮毫
- 23 読易（嘉永四年（一八五二）頃）
- 24・26 病中雜詩（三首）（嘉永五年秋）
- 27・33 感懷十首 節七 *朱子学への傾倒などを詠む。七首のうち二首に刪の指示。もとの十首は弘化二年（一八四五）の作、嘉永五年頃改刪。
- 34・35 送池辺龜三郎帰省（二首）（嘉永五年冬）
- 36 送永島某東行（嘉永六年三月）
- 37 送鮫島生東行（嘉永六年九月）

■「和池辺子見寄韻」

- 有所感而作 *後作の「困甚其何変」と「心官只是思」の二首。塗改文で感懷十首節七に統合して七首とする。上欄に三・四の指示。

■「偶作」（嘉永六年）

- 38・39 偶作（二首） 40 又
41・42 送浅田生帰国（安政二年（一八五五）春）
43・44 和高橋維韶見寄韻（安政二年五・六月） ■「画梅」
45 村居偶作

○46 田中虎六爲吾作四時軒記。賦七古一篇爲謝（安政二年六・七月）

*肥前藩士田中虎六郎の四時軒記に謝した古詩。小楠詩中で最長篇。開国へ。

○47・51 村居雜詩（七首 節五） *沼山津四時軒の生活。逸民への憧憬。

52・53 和道家・元田二子酬和之韻（安政三年）

○54・60 沼山閑居雜詩十首 節七（安政四年春） *九首あり。二首に刪

の指示。堯舜の政治と西洋。「人君何天職」

61 送櫻井純藏帰郷（安政四年春）

62・66 和田茶陽韻（五首）（安政四年秋） *第五首に○。「情性聊同老杜詩」

67 和田子敏見寄韻（安政四年秋）

■「和内藤生元日韻」（安政五年正月） *「小楠遺稿」

○68 題楠公父子訣別図 *楠公父子の別れの図に題す。「奚曾一点愛名心」

○69 偶作（安政五年三月） *越前に招聘され出立時の詩。「成否在天不在人」

○は「小楠堂詩草」で丸印がある詩。■及び「」は横井時雄編『小楠遺稿』

「遺稿篇」の「小楠堂詩草」で加えた詩及び語。（ ）は推定作詩時期。

○印がついた詩は小楠を語る際、しばしば引かれる重要な詩であり、安政五年（一八五八）までの小楠がおおむね理解できる。これは恐らく自分の過去を振り返り、重要なエピソードの詩と認め、これらの詩を重点的に読んでほしいという小楠のメッセージである。また福井招聘以前の詩に限られるのは、福井招聘以前の詩が玉石混交、雑多であるからであろう。

以上を勘案すると、小楠は誰か大切な人に贈るため、来しかたを振り返りながら旧稿を整理し、詩集の「定本」を作ろうとしたのであろう。時期は元治元年頃、激動の政治生活から沼山津に帰り塾居している間。『小楠堂詩草』はその定本作り用の「詩作ノート」であった。

詩の制作時期を見ると、嘉永五年頃からはおおよそ確定できるが、それ以前の詩ははっきりしないものが多い。その中で小楠自身が重要として○印を施し、天保十四年と弘化二年（嘉永五年頃改刪）と制作時期がわかる二

つの「感懷」詩は、小楠が酒の上での失敗から江戸より帰国、学問修養をするとともに、弟子を取り、長岡堅物ら仲間と講習討論に励んでいた実学派興起時の状況を知る資料として貴重である。

Ⅱ 「感懷二首」——修己治人

七言律詩で、二首それぞれに「已往を感懷」・「時事を感懷」の語句があり、そこから名づけたのであろう。「已往」（過去）を捨て、切磋琢磨して未来のために学問・講習討論をする。それは何ためか。「時事」（現在）塗炭の苦しみにあえぐ民を救い、豊かにするためである。こう高らかに宣言する二詩は、それまでの小楠の詩には見られなかったものであり、素朴ではあるけれども、天保十四年（一八四三・三十七歳）実学派結成時の熱気を伝え、その後の小楠の生き方の根本を象徴する詩として注目される。

一 第一首 実学派の興起——修養と講習討論

感懷已往悔何追	已往を感懷し 悔いて何をか追わん
渾付逝波来日期	渾て逝く波に付し 来日に期す
不挾冬温夏冷処	冬温かく夏冷しき処を挾ばず
欲凌天熱地凍時	天熱く地凍える時を凌がんと欲す
簡編有味前賢意	簡編 味わい有り 前賢の意
高尚従他流俗嗤	高尚 他に従わん 流俗の嗤
寄語親交諸君子	語を寄す 親交の諸君子
苦言無惜療吾痴	苦言 惜しむ無かれ 吾が痴を療す

（過ぎ去ったことを思い、悔やんでも仕方がない。すべてゆく波のままに従い、来る日を期す。冬には温かく夏には涼しい所をえらばないで、天の焼けるような暑さ、地の凍えるような寒さを凌いで行きたい。書物に昔の賢人の考えを味わい、志を高く保ち俗世間の嘲笑は気にしない。親しく交わる諸君子に言いたい。遠慮なく苦言して我が愚かさを是正してくれたまえ）

この詩は小楠らしさがよく表れていて、筆者が好きな詩の一つである。作詩の時期は詩の内容、次の第二首の考証からして、天保十四年、同志と講習討論し、朱子学など勉強していた時期と考えられる。

一・二句は、天保十一年（一八四〇）酒失によって帰国させられた自分を踏まえて詠んでいる。済んだ事は仕方がない、これは運命であるから、また次を期せばよい。小楠の生き方である。彼の詩には「知る今渾て流波に付し去り 却て怪しむ無心老禪に似たるを」（村居雜詩七首）、「紛紛たる閑是非一生逝波に付す」（寓言五首）など「逝波」「流波」といった言葉がしばしば使われる。また「窮通天なり吾奚ぞ敢てせん 流水行雲是れ此の身なり」（和野野口生韻）とか、「進退は天命に任せ 従容として道心を養わん」（感懷十首）などと「天」「天命」に任せることを詠んでいる。

三・四句は何を意味するのであろう。天は人間に使命を与える。その使命を果たすために、人間は試練に耐え、自分を向上させていかなければならない。困難な時こそ人間が磨かれる、人間を磨くべきだ。これは「謁堀大夫墓」にも見られ、終生一貫する考えである。後の「感懷十首」（淇水文庫本）でもこれを進めて、「吾が輩道に志し 当に鞭つべし百怠惰 食は餓えざれば足り 衣は寒えざれば是れ可なり」と述べる。その目的は「道」の実現のためである。「利」のためでない。

五・六句。では人間をどう磨けばよいのか。その根拠となるのは書物（古典）である。書物により昔の聖人の事跡を学び、それを現在に生かし実践していく法を考えるのである。「感懷十首」の冒頭の詩に「書を読みて古人を見るに 反つて思う志高からざるを 聖賢直ちに自ら期し 磨礪何ぞ勞を厭わん」とある。「聖人学んで至る可し」（『近思錄』の程伊川の言葉）の確信は宋学の基本精神であった。志を高く持ち勉強している（学は己の為にす）限りは流俗（俗世間）の嘲笑など気にすることはない。この流俗には当然小楠ら改革派に反発する人たちの嘲笑が念頭にあるであらう。「我れ誠意を尽し道理を明かにして言はんのみ。聞くと聞かざるとは人に在り。亦安くんぞ其人の聞かざることを知らんや」（『沼山閑話』）とも言う。

最後の七・八句は、書物から実践への真剣な講習討論を述べる。親交諸君子とは、志を同じくし一緒に講学を始めた長岡監物・下津休馬・荻昌国・元田永孚ら実学派の人達を指す。前賢の書を読み、年齢・身分・個性の違いを乗り越え未来へ向けて皆が納得できるまで自由に徹底的な講習討論をしている。「遠慮なく苦言して我が愚かさを是正してくれたまえ」という他者の批判を受け入れる開かれた姿勢は、話し合いを信頼して、そこから出た結論に

従い、それを皆で共有して行こうと宣言している。小楠にそういう場が初めてできたのである。この詩は実学派興起時の小楠の意気込み・興奮を伝えるものである。

本詩はすでに触れたが、二年後（弘化二年）に詠まれた「感懷十首」（淇水文庫本）の多くの詩の内容と共通する。例えば、第二首「少壮意気を貴ぶ故に俗を驚かすの行を為す 一旦往事を悔ゆれば 恍惚として天性を見る 書卷に道味を知り 善端に畏敬を加ふ 語を寄す故旧の人 笑う勿れ厳正を持すと」や第十首「吾輩道に志し 当に鞭つべし百怠惰 食は餓えざれば足り 衣は寒えざれば是れ可なり 猛省す名利の心 事に処するに我無からんと欲す 豈に学を為すの地に非ずや 之を同心の者に告ぐ」などは同じように過去の反省、道の達成のための懸命の人間修養（読書）、名利の排除、仲間たちとの講習討論を詠んだものである。ほかに「榮利は浮雲の如く 意思世と別なり 只だ典籍の楽のみあり 道味誰に向かいてか説かん」（第三首）や「吾陶靖節を愛す 貧賤憂うる所に非ず 窮居して書卷に対すれば 襟懷自ら悠悠たり」（第七首）などからも私利を捨て、過去の聖賢から道を学ぼうとしているこの当時の小楠の姿がうかがえる。

二 第二首 民のための政治―民非ずんば国何ぞ立たん

この詩は『詩経』の七月篇を読んで、周公の頃の民と現在塗炭の苦しみにあえぐ肥後藩の民を比較し、藩政を批判してなんとか民を救いたいと切望する詩である。驚くべきことに、少なくとも詩で見える限り、小楠は民と同じ目線に立った詩をこの詩まで詠んでいない。「民」という言葉もこの詩で初めて使われた。小楠の思想的転機を表わした注目に値する詩である。

誦去周公七月篇

誦し去る 周公 七月の篇

感懷時事只空憐

時事を感懷して 只空しく憐れむのみ

潮崩新墾田成海

潮は新墾を崩し 田は海と成り

風破荒村人泣天

風は荒村を破り 人は天に泣く

郷県三秋社鼓斷

郷県 三秋 社鼓斷え

都城一夕凶音伝

都城 一夕 凶音伝う

廟堂幸有諸賢在

廟堂 幸に諸賢在る有り

救卹斯民無罪年

斯民を救卹して 年を罪する無かれ

(周公の七月篇を誦して、現在のことを思うと、ただ空しく悲しむしかない。今朝は新しく開墾した土地を崩し、田畑は海となり、風は荒れた村を吹きすさび、人々は天を仰いで泣いている。田舎ではこの秋中、社の太鼓の音も響かないが、城下にはある夜、凶報がもたらされただけである。廟堂(当路)には幸いに諸賢人がおられるではないか、年のめぐりあわせにしないで、この民を救っていただきたい)

一・二句の「七月」は『詩経』国風・豳風の篇名。周公(周公旦)が周の王業を述べ、甥の成王を諭したとされる。集伝にも「周公、成王未だ稼穡の艱難を知らざるの故に、后稷公劉風化の由る所を陳し、警蹙をして朝夕諷誦して以て之を教えしむ」とあるが、実際は周代農村の一年の農事儀礼(生活)を四季の風物とともに歌った詩である。第一章だけ紹介する。

七月流火 九月授衣(七月にはかたむきゆく火の星 九月には着物の用意)

一之日麋(ひつば) 二之日栗烈(りつれつ)(十一月はひゅうひゅう 十二月はひりひり)

無衣無褐 何以卒歲(着物もなく毛織物もなければ、どうして年がこせる)

三之日于耜 四之日于趾(さて正月には鋤の用意 二月には足をあげて耕す)

同我婦子 饁彼南畝(年よりが)うちの嫁と子供をつれて、南の方の耕作地へ

弁当をもってゆけば)

田峻至喜(見廻りの奉行さまもそこへ見えて満悦)

小楠はこれを読んで四時秩序だつて平和な農民の姿に引き比べ、現在の肥後藩の民の実情に思いをいたし、同じ民でありながらその落差に暗澹たる思いを抱いた。

三・四句。「潮は新墾を崩し田は海と成り」以下の二句は、天保十四年(一八四三)九月三日の肥後藩における台風・高潮による大災害を指すと思われる。『肥後近世史年表』を見ると、「大風、高潮にて藩内南北海辺新地被害あり、海辺新地塘切三千二百二十一間八合、潮入田畑二千七百三十一丁三反四畝余、家屋倒潰破損一万五百四十八軒等(御郡方)」とある。天保十四年の前後数年、このような災害の記述は年表に見えない。この詩はまず間違はなく、この年の災害を目の当たりにした小楠が被災に苦しむ庶民の姿に思いを馳せ、いたたまれなくなつて詠んだものと思われる。

特に天保十四年は災害がひどく、前後数年間と比べてみるとその損毛高は、天保十年(一六六、二五九石)。同十一年(二二〇、四九四石余)。同十

二年(二三万石余)。同十三年(一六万石余)。同十四年(三四万石余)。弘化元年(一三二、八六〇石余)。同二年(二二五、八九八石余)ときわだつて多い。

五・六句。したがって田舎ではこの秋盆踊りどころでなかった。天保十四年に盆踊り禁止令が出されている。『嶋屋日記』を見ると、「天保十四年卯七月、盆踊之儀、大公儀御取り締二付而者、御國中一統盆踊差留二相成り候間、限府町も同様二候得共、御郡代・御惣庄や願二よりて、羽踊者御免二相成候得共、」とある。しかし、城下ではそのような地方の実情は他人事である。農民達が災害によつて長期間苦しめられているのに、藩当局ではそれを知りながら有効な手が打てない。「是月(天保十四年九月)、藩主格別の思召を以て、藩主御分料を初め、家中一統十月以後三割減とす」と米価の値下がりで苦しむ藩士に追い討ちをかけるだけである。

最後の七・八句。小楠は、そういう藩の当局者を手厳しく批判する。「廟堂の諸賢」とは小楠の最大限の皮肉であろう。「謁堀大夫墓」でも言うように上に人材がない。「斯民」は『孟子』梁惠王上に「之を如何ぞ、斯の民をして飢えて死なしめんや」とある。孟子は「為政者が贅沢をし、民衆が飢餓に迫られるのは、人を獣に食べさせるのと同じだ」と批判する。また「年を罪する無かれ」は『孟子』梁惠王上の「王、歳を罪することなければ、斯わち天下の民も至らん」を踏まえる。ここで孟子は梁惠王に対し、「豊作の時に浪費をとどめ、凶作の時には施米をする。そうした永続的な配慮を怠つて、……凶作で人が死んだばあいに、それは、自分には関係ない、その歳のめぐり合わせだとして、いささかの政治的な責任もとらないのでは、民衆のつき従うはずもない」と厳しく批判している。

この詩からは藩の無策に対する小楠のやむにやまれぬ気持、切迫感が伝わってくる。それは先に政策提言書「時務策」(天保十三年頃)を草した時の小楠の気持とつながるものがある。すなわち彼は「時務策」の「節儉の政を行ふべき事」において、『孟子』の「盍返其本(なんぞ其の本へ返らざる)」「(梁惠王上)を引いた上で、「扱其節儉の本と云は聊も官府を利する心を捨て一國の奢美を抑え士民共に立ち行く道を付くるを云事なり。凡て是迄仰出られたる節儉は上の御難洪に因て諸事御取メに及ばれ、御家中手取米を減ぜられ又は町・在に懸け寸志銀を取らるる道行にて一ト口に云へば上の御

難洪を下より救ひ奉る故に節儉を行はせらるると云筋に当り、是は節儉と云ふにて無く聚斂の政と云ふ者なり」と、日頃節儉に心掛けず華美に流れ、「上下困窮に陥入難洪差迫」つてから藩士の俸禄カットや町・在からの税を取りたてる場当たり政治を「聚斂の政」だと批判しているが、今回の災害に際しても同じ思いを強く抱いたことと思われる。¹⁷⁾

本詩は小楠が初めて庶民の苦しみを詠んだ詩として注目される。小楠の以前の詩は専ら関心が風俗・歴史・勤王・君臣のあり方にあつて、現実の政治に対する批判が弱い。江戸遊学を詠んだ漢詩集『東游小稿』（天保十・十一年）は天保の大飢饉の直後で、道中農民の惨状を見たはずなのに、その様子は詩に詠まれていない。小楠は熊本に帰つてのち、必死の学問及び具体的に見聞を通じ、肥後藩における士民の苦しみを初めて自分のこととして受取り、以後の自分のよつて立つ道を見出したのである。すなわち「時務策」において「士民の困窮」のため、「士民立ち行く」政策を打ち出した小楠は、「潮は新壑を崩し田は海と成り 風は荒村を破り人は天に泣く」惨憺たる自然災害を目の当たりにして藩の無策への憤りをより深化させ、「民のため（斯民の救卹）の王業」、すなわち為政者たるものの究極の責任を確信したのである。小楠が『詩経』七月篇を読むきっかけは、熊沢藩山『集義和書』（巻十六）に「国の本は民也。民の本は食也」とあり、七月篇を詳しく解釈するのに触発されたものであろう。しかも後に鮮烈な印象として回顧している。小楠は七月の詩をどう読んだのか。「感懷二首」から十四年後に詠まれたかの有名な「沼山閑居雜詩」（安政四年（一八五七））に次の詩がある。十八句の古詩。書き下し文のみ挙げる。

曾て七月の詩を読み 深く知る王業の基 民非ずんば 国何ぞ立たん
これを愛して食衣を饒かにす 十に一を征め 尚おその時を失うを恐る
其所以なり 四時に民に事を授け 老を養い幼兒を慈しみ 彼の南畝に
鋤するを見 田畯 喜び怡怡たり 如何ぞこの道を捨て 民を剥して
其の私に供し 租税は十に五を征め これに加うるに縛笞を以てす 蕩
蕩たる天下の是 累卵の危うきに坐すが如し ああ 七月の詩 これを
讀みて双淚垂る （元田の評） 亦慨歎す

（注）○十征——十分の一の税率。井田法。周代の租税制度。○彼の南畝に

——『詩経』七月参照。○租税十征五——江戸時代五公五民を通則とした。

これは七月の詩を読んだ時の印象がいかに強かったかという証拠である。同時に小楠が七月の詩を読んで、「双淚垂る」と涙した原因が何であつたかを明白に示している。「かつて七月の詩を読んで、深刻に王業の礎の何たるかを知った。民がいなければ国家はどうして立ち行けよう。民を愛して衣食を豊かにする。これが政治のよつて立つ所以である。」このとき小楠は自分の進むべき道、なすべき役割をはつきり認識したのである。この詩に「民」が三度も使われていることもそれを象徴している。

ところで、この詩は現在の『小楠堂詩草』の「沼山閑居雜詩 節七」に無く、山崎氏が「伝記篇」で紹介する横井時靖蔵写本『小楠堂詩文集』に収録の「沼山閑居雜詩」十首に含まれる。¹⁸⁾なぜ小楠は「沼山閑居雜詩」を改作する際、この詩を削ったのだろうか。それ程軽いものであつたのだろうか。違ふと思う。安政四年、「沼山閑居雜詩」を詠んだ当時は確かに「七月の詩」を読んだ記憶・印象はまだ強烈で、「民非ずんば国何ぞ立たん」の考えは小楠の思想の大きな柱であつた。しかし、後になると彼の思想はそれを基本としながら、具体化・体系化されたものへと発展を遂げる。そこからみると「感懷二首」の七月の詩は記念碑的なものであつても、それを再確認した「沼山閑居雜詩」の詩はあまりにも自明で感傷的なもので削つたと思われる。したがって「沼山閑居雜詩」のこの詩は、小楠思想の変遷をたどる資料として十分貴重なものである。

小楠は書物・学問によつてのみ変わったわけではない。そこに書かれたことが現実（肥後藩の政治）においてどうかと見直し対比し、それを仲間と腹藏なく講習討論する中で、これまで他人事であつた現実が具体的に切実に構造的にとらえられるようになったのであろう。その結果として「民非ずんば国何ぞ立たん」と「民のための政治」という自覚にたどりつき、「これを愛して食衣を饒かにす」と自分の進むべき道をしっかりと見定めたのである。¹⁹⁾

小楠における最初の大きな転機、その二つの柱「学問と講習討論」「民のための政治」、すなわち朱子学の基本である「修己」と「治人」を読み込んだのがこの「感懷二首」であり、実学派成立期の講習討論の熱気を伝え、彼が民を富ますという政治上の目標を明確に自覚した詩として注目される。

Ⅲ 「感懷十首」と「三代」

一 「感懷十首」とその序

「感懷十首」（古詩）は、もともと「感懷十首並序」と題し、弘化二年（一八四五）四月の序がある。序に言う。

書に云う詩は以て志を言う。某諸賢の後に従い学を講ずること茲に年あり。是を以て得る所無しと雖も、而も心に感ずることは則ちこれ有り。乃ち見る所を述べて詩十首を得たり。唯其れ末学の言理浅くして辞蕪に人道に關係する無きが如しと雖も、而もこれを平生の志に発すれば、則ち夫の空理を談ずる者の言と少しく異なる者有らん。是れ自ら警めて又以て諸賢に呈する所以なり。伏して願わくは諸賢其の理を折衷し其の辞を釐正し開道教示する所あらば則ち幸甚なり。（原漢文）

ここで小楠は数年来、諸賢と学問・講習討論しながら見聞し感じたこと、すなわち自分が現在到達している境地を十首の詩によって示したと言っている。すなわち「感懷二首」がある意味の出発点で、「感懷十首」は弘化二年の段階での学問・講習討論の到達点を「感懷」（思）を込めて詠み込んだのである。そのことを意識し明確にするために、小楠はあえて「感懷二首」と同じ「感懷」の名をこの十首に冠したと思われる。そのことは、「感懷二首」及び以降の詩（特に○がついた詩「偶作二首」、「送池辺熊蔵帰柳川」）に「感懷十首」と共通する小楠の折々の心境・思想（熊沢蕃山の「集義和書」や徂徠学・陽明学の批判など）が詠みこまれていることで確認できる。

二 「感懷十首」のテキスト

「感懷十首」はのちに小楠の考えの変化に伴い何度も改稿される。小楠にとって余程大切な詩であったのであろう。少なくとも四回以上は改稿されている。最後の改稿（『小楠堂詩草』の塗改文。すなわち『小楠遺稿』『遺稿篇』の「感懷十首 節七」）に至っては、当初の十首のうちの約半分の詩しか残っていない。序文も省かれている。したがって「感懷十首」を論ずるには、これらテキスト間の問題を解決し、小楠の思想の変化をたどる必要がある。

「感懷十首」に関しては五種の異なったテキストが残っている。

（イ）水俣市立蘇峰記念館の淇水文庫所蔵「横井小楠先生語録見聞録及手簡」なる綴中（写本冊子）に収められている「感懷十首並序」。山崎氏が『伝記篇』（八七頁）に紹介する。筆写は小楠とは別人。

（ロ）嘉永二年（一八四九）に三寺三作が小楠から預かり、その他四点とともに福井に持ちかえった「感懷」。福井県立図書館所蔵の松平文庫中に、『機密録』と題した冊子に所収。序文あり。筆写は小楠。

（ハ）『小楠堂詩草』の塗改前（原文）の「感懷十首 節七」。序文なし。一首あとに「有所感而作」二首がある。『小楠堂詩草』の配列では嘉永五年頃に置く。この頃改訂か。

（ニ）『小楠堂詩草』の塗改文による「感懷十首 節七」。序文なし。原文「感懷」七首のうち二首を削り、「有所感而作」の二首を加えて七首とする。『小楠遺稿』『遺稿篇』はこれによる。

（ホ）横井家文書所収の『横井先生詩集』（畏斎先生詩）にある「感懷八首」。序文なし。筆写は小楠とは別人。成立はハニの間か。

五種のテキストのうち、当初の十首と序がそろっているのは（イ）淇水文庫蔵「感懷十首並序」（淇水文庫本と略称）と（ロ）松平文庫蔵「感懷」（松平文庫本と略称）のみで、「感懷十首」の原型を留めている。しかし両者を比較してみると、意外なことに若干の文字の異同のみならず、十首の詩も全てが同じではなく、それぞれ一首が別のものであり、（イ）（ロ）二つの「感懷十首」間で改稿があることがわかる。

三 「感懷十首」校勘表

まず（イ）（ロ）二つの「感懷十首」の校勘表をあげてみよう。この二つの「感懷十首」は『小楠遺稿』や『遺稿篇』などには収録されていない。²⁰

①が淇水文庫本、②が松平文庫本の順序。（ ）は松平文庫本の文字。

■は『小楠堂詩草』の原文にない詩。（刪）はさらに塗改文で削られた詩。

1 ①読書見古人 却思志不高 聖賢直自期 磨礪何厭勞 汗血驚鞭影
奔帆載雪濤 消除（却）經營心 超達即人豪

2 ②少壯貴意氣 故為驚俗行 一旦悔往事 恍惚見天性 書卷知道味
善端加畏敬 寄語故旧人 勿笑（謂）持嚴正 ■

3 ③大途何紛紛（豈守孤介節） 閉門養吾拙（空嘆人道歇） 親朋晨星少（朋以少

加親）轉覺相愛切（詩從進益拙） 采利如浮雲 意思与世別 只有典籍
楽 道味向誰説

4 嘗読朱子（洛閣）書 如有会其旨 致知固不輕 所重在実履

静裡養間（閑）氣 動処察天理 須臾不離道 到此是達士

5 明儒何俗陋 尽失聖學真 王氏矯其弊 却於一偏傾 如賢于俗儒

要之失道均 君子有大道 豈向邪径行

6 吾慕退翁学 学脈淵源深 洞通万殊理 一本会此（斯）仁 進退任天命

從容養道心 嘆息百年久 傳習有幾人

7 吾愛陶靖節 貧賤非所憂 窮居对書卷 襟懷自悠悠 朝与仁義生

夕死復何求 此人真千古 清氣衝斗牛 第五第六全用陶句

8 静観流行妙 深感天道新 窮陰殺百（万）物 渾為發生春 不究消長理

安知化育仁 珍重哲人（先哲）言 嚴刑肅人心 （刪）

9 幽厲失朝綱 王室東方遷 何者乘此際 開成邪径端 既竊一世功

又為漢唐先 古今婦功利 管仲罪通天

10 吾輩志於道 当鞭百怠惰 食不餓而足 衣不寒是可 猛省名利心

処事欲無我 豈非為学地 告之同心者

× 吾家世此祿 恩義江海深 為君豈惜身 憂国丹赤心 治教期三代

不列漢唐林 思之不能休 刻苦寤寐欽 （刪）

この校勘表を見ると、淇水文庫本と松平文庫本とは十首の配列順が最初の部分（1・2）と最後の詩（10）以外は順序が異なる。5の詩は松平文庫本になく、③の詩は淇水文庫本になく、入れ替わっている。

問題は淇水文庫本と松平文庫本の先後であるが、5の詩が（ロ）（ハ）（二）（ホ）になく、淇水文庫本のみにあるのに対し、松平文庫本の③の詩がさらに『小楠堂詩草』の原文（ハ。嘉永五年頃）に残り、塗改文（二）で刪として削られているのからすると、淇水文庫本の5を松平文庫本で③に入れ替え、順序を変えたのだと想定される。淇水文庫本の方が早期のものだと見なしてよい。ではいつ、なぜ二首の入れ替えが行われたのであろうか。次に入れ替えられた③の詩に見える「三代」の語に注目して考察していきたい。

四 淇水文庫と松平文庫で一首（5と③）が入れ替わった理由。

淇水文庫本の抄者や抄写時期は定かではないが、松平文庫本「感懷（十

首）は嘉永二年（一八四九）十月、松平春岳の命を受け「朱学純粹の儒者」を探しに来熊、小楠の塾に二十日ほど滞在した三寺三作が福井に持ちかえった五点の小楠の著作の一つである。その五点とは、

（1）本庄一郎宛書簡「奉問条々」（『遺稿篇』一二六頁）

（2）恭題 恭（ママ。泰）勝公和歌巻後（恭しく泰勝公の和歌の巻後に題す。『遺稿篇』六九三頁）

（3）題見聞私記後（見聞私記の後に題す。『遺稿篇』六九四頁）

（4）読諸葛武侯伝（諸葛武侯伝を読む。『遺稿篇』六八七頁）

（5）感懷（十首）

であり、福井県立図書館の松平文庫所蔵の『機密録』（副題「熊藩横氏著書密簡」）に所収される。三寺三作は嘉永三年二月福井に帰ってから、

貴公様昨年久留米の儒官本庄一郎方へ御掛合ひの御書取り並に御書懷之尊作、小子社中え拝見致させ申し候処、御卓見之程憚り乍ら何れも感じ入り奉り候。誠に天下之風俗日に増し澆季に相向ひ、其上洋夷之變紛々たる事に御座候得ば、忠信（ママ）義士は寢食を廢する時節に御座候へ共、举世王公士大夫徒に驕情を甘んじ名利に相走り候は天下統一統の弊風に存じ奉り候。然る処九州に於いて貴公様方に御出遇申候は、沙中に金を得候心地と存じ奉り候。（嘉永三年二月十八日。三寺三作の小楠宛書簡。『遺稿篇』一三九頁）

と福井藩の家中にこれらの作品を披露し、皆感服したと書いている。また「横氏大誤」という松平春岳とされる書き入れもあり、松平文庫に『機密録』として所蔵されるところから、大切に読まれたことがわかる。²¹

これに対し、小楠も

本庄取遣之書並書懷之卑稿御社中に御示成され候旨甚以汗背仕候。別て書懷は旧作にて道理不行届之处多、改作仕心組にこれ有り候。本庄取遣之書は去月返紙参り、少々評語之様なる事を書入遣し申候。聊卓見これ無く本意に背き申候。（嘉永三年五月十三日。三寺三作宛書簡。『遺稿篇』一三六頁）

と、家中に見せたことに謙遜し、書懷（感懷十首）の改稿をにおわせているが、まんざら悪い心地はしなかったであろう。小楠は三寺の帰国にあたって、他藩の人たちを意識し、自分の思想展開を理解してもらいたいとの願いを込

めて、代表的著作を精選したものと思われる。しかも書体からすると、五点はいずれも小楠のものに間違いなく、一気に書かれている。恐らく三寺の帰国に際し、何か代表的著作をと言われ、この五点を慎重に選び、手ずから書き写して与えたものであろう。

それでは五点に託した小楠の自分像（思想）とは何であろうか。五点の著作それぞれを検討することも必要である。しかし本稿ではなぜ小楠が「感懷十首」の詩を一首だけ入れ替えたのか、その詩にどうして「三代」の語があるのかの点に注目し、5と③の二首と他の四点の著作との関連を考察することにより、小楠が伝えようとした自分像（思想）とは何かを考察してみたい。

1 ③の詩（松平文庫本・小楠堂詩草）と他の著作（2）（3）（4）との関連について。

最初に松平文庫本の③の詩が他の著作とどう関連しているのか、考察してみたい。③の詩を再度挙げてみる。（ ）は『小楠堂詩草』原文。

吾家世此祿 吾が家はこの祿を世よにし

恩義江海深 恩義江海より深し

為君（国）豈惜身 君が爲豈に身を惜しまん

憂国（愛君）丹赤心 憂国丹赤の心

治教期三代 治教は三代を期し

不列漢唐林 漢唐の林に列せず

思之不能休（已） 之を思いて休む能わず

刻苦寤寐欽（憤励日夜欽） 刻苦 寤寐に欽しむ

この詩の前半四句は、我が家が代々細川家の祿恩を蒙っていること、君を愛し國を憂えていること。後半四句は、治教は三代を目標とし、漢や唐は見習わない、三代の治教を常に思い、日夜身をつつしみ刻苦努力していると述べる。前半と後半があまりつながらない詩であるが、感懷十首の他の九首に見られない内容を読み込んでみる。前半四句と後半四句に分けて、他の著作との関連を考察していく。

A 前半4句と「(2) 恭題泰勝公和歌巻後」——俸祿の恩と愛君憂国

③の前半四句は我が家が代々細川家の祿恩を蒙り、君を愛し國を憂いていると、自身の忠君憂國観を述べる。後に「南朝史稿」の執筆などを通して小

楠の君臣観は変化していくが、当時は「然りと雖も臣と為りては豈に君を尤めんや 彼の君を尤むる者は心は赤ならず」などと無条件の忠君意識が強かった。他の四点との関連を見ると、(2)の「恭しく泰勝公和歌の巻後に題す」（天保十四年「一八四三」三月上巳節後二日作とある）に前半四句と同様の内容が述べられている。

臣横井時存謹んで巻後に題して曰く。凡そ我が一藩の人士口に食有り、身に衣有り、病むや医薬有り、死ぬや葬祭有り、以って其の生を成すこと有るなり。唯だ其の生を成すこと有るのみならず、我が父は是を以てして生き、我が祖父は是を以てして生き、推して高祖・太宗の先に及んでも是を以って其の生を成すこと有らざる莫し。ああ、是れ誰の賜ならんや。一念にこれを思う毎に敬懼の心悚然として起こり、粉身碎骨して以て國家に報いても足らざるなり。則ち寵栄を希望し、非分を僥倖し、凡そ以って其の私を営むは、何の暇ありて心に発せんや。且つ夫れ君臣は猶お父子の如きなり。天性に本づき自然に成れば、則ち君を愛し國を憂うは忍びざるの誠より出づ。仮令疑いを其の君に取り、以て不実の罪に陥れらるるとも、一念に君を怨まざるは是れ忠臣の心然るなり。（原漢文）傍線部を詩句にすると、③の詩の前半四句となる。「恭題泰勝公和歌巻後」は、小楠が長岡堅物の求めにに応じて、泰勝公（細川幽斎）の和歌の巻後に題したものであるが、小楠は恐らく、この文章により細川家初代の泰勝公の事跡を称えるとともに、肥後藩士としての自分の立場を他藩の人に意識的に示そうとしたのではないか。これは一種の社交儀礼である。感懷十首にはこのような具体的自己紹介、及び忠君憂國観を詠んだ詩がないので、あらためて③の前半四句に読み込んだものと思われる。

B 後半四句と「(3) 題見聞私記後」——「(4) 読諸葛武侯伝」——時務と三代

③の詩の後半四句の冒頭（五句目）に注目の「治教期三代」の句がある。そもそも二首の入れ替えと他の四点の著作との関連を調べてみるきっかけは、(3)と(4)の漢文作品の中にいずれも「三代」の語が使われていることに気付いたことによる。しかも(3)には③と同じく「三代を期す」とある。これは偶然ではあるまい。

まず後半四句と「(3) 題見聞私記後（見聞私記の後に題す）」との関連を見てみよう。これは制作時期が天保癸卯（十四年、一八四三）冬十一月と

はつきり記された作品である。⁽²⁵⁾

見聞私記とは長門崇文公の言行録なり。……。先君は唯だ天資の美あるのみならず、学を好み、賢に親しみ、至誠にして民を愛す。二十有二にして封を承くも、月を越えて乃ち卒す。卒するの日一藩哭泣して、父母を失う如しと。……。公は蓋し大賢の資を以て、篤く聖人の道を信じ、民を治めるには必ず身を修めるを本とし、身を修めるには必ず閭閻より始む。関雎・麟趾の徳に法り、周官の法度を行わんと欲す。其の立志の大、識見の明は直ちに三代を期して、秦・漢より以下は屑(いさぎよ)しとせざる所なり。……。聖人の道を信じ、躬行の徳に基づき、以て其の民を治めし者は唯米沢の鷹山公有るのみ。……。ああ、聖道の治其の効はかくの如し。而れども世は方に功利・権変を以て民を治め、益々治めて益々弊し、嘗て少しも悔悟せざるは、其れ又何の心ぞや。ここに論付して、以てこの巻を読む者に告ぐ。天保癸卯冬十一月。(原漢文)

(注) 長門崇文公—毛利齊広(なりとう)。一八一四—一八三六。十二代萩藩主。毛利齊熙の次男で毛利齊元の養子。聡明の誉れが高かった。

ここでは長門崇文公(毛利齊広)の「民を愛す」人柄を述べ、篤く聖人の道を信じ、身を修め、立志・識見とも「三代」を期したことを述べる。「其の立志の大、識見の明は直ちに三代を期して、秦・漢より以下は屑しとせざる所なり」は「感懷十首」③の「治教は三代を期し 漢唐の林に列せず」とほぼ同じことを言っている。長門崇文公のこうした政治的態度を小楠は称賛する。また米沢の鷹山公(上杉鷹山)も同様に聖人の道を信じ、身を修め民を治めた立派な君主として称賛する。小楠はこの二人を理想的君主として挙げ、他の君主は功利・権変として排除する。

上杉鷹山については、同時期に書かれた「時務策」の「御家中の風俗を正す事」(『遺稿篇』では略す)にも「当今列藩の中、聖人の道を厚く信じ、忠孝礼節を以て、国本を立てられたるは、米沢の鷹山公なり」と称賛する。その理由は「彼を見、是を考へ推して夏殷周三代の世の質忠文を尚ひ各々一代の向ふ処の道を立てられた」と「三代」の世が意識される。また、立花壱岐宛書簡(弘化二年七月一日)⁽²⁶⁾でもはつきり「皇朝にては三代之治道は独此公(上杉鷹山)のみと存じ奉り候」と述べており、この頃の小楠にとって、上杉鷹山は「三代の治道」を実践する理想的君主であった。

次に「(4) 読諸葛武侯伝」との関連を見てみよう。諸葛武侯は蜀の丞相、諸葛孔明のこと。小楠は、いつか才能を認められ世に出て活躍したいと思う人たちと同様、孔明に惹かれていた。「愛す他の好々たる南陽の老〔孔明〕清濁混同して渾て違わず」(『村居雜詩』安政二・三年)と詠む。

司馬徳操云く。儒生・俗士は何ぞ時務を知らんや、時務を知るは俊傑に在りと。この言は以て天下の学ぶ者を戒む可し。蓋し学ぶ者に貴ばれる所は、知見洞達して天人の理を明らかにし、而して事変の宜しきに適い、之を行うこと正大光明なること晴天白日の如きを以てすることなり。

……。我が輩日夜此の学を講習し、勉めて修励する所以は、己を修め人を治むるの道にして、知識の明ならざるを責め、力行の及ばざるを鞭打ち、必ず賢人君子を期して止まるのみ。夫れ道は経に存し、此に求めれば足る。然りと雖もこれを人に求めざれば、則ち賢を願うの心は其れ或は実らざるなり。是を以て賢人君子の伝を求めてこれを読むに、三代より下(のち)は諸葛武侯より盛んなるは無し。而して徳操の謂う所の俊傑の者は其の人なり。(原漢文)

(注) 司馬徳操—司馬徽(き)。三国蜀の潁川の人。劉備のために諸葛亮・龐統を薦めた。「襄陽記に曰く、劉備世事を司馬徳操に訪う。徳操曰く、儒生俗士、何ぞ時務を識らんや。時務を識るは俊傑に在り。此の間自ら伏龍、鳳雛有りと。備誰為(た)るかを問う。曰く、諸葛孔明、龐士元なりと。」「(三国志)卷三十五、諸葛亮伝、裴松之注。

この文は儒生・俗士は時務(その時に実行しなければいけない政治)を知らないと批判した上で、自分が日夜修養し、聖人君主を期し、理想とする道の実践者を歴史上から探すと、「三代」以降では司馬徳操の「時務を知る俊傑」すなわち諸葛武侯であると述べる。⁽²⁷⁾小楠は「文武一途の説」(嘉永六年正月)でも同じ司馬徳操の言葉を引き、「草廬の中に在りて天下三分の大略を定て、用ひらるるに及で果して其言に背かず」と称賛している。

ここに述べる諸葛武侯は単なる軍師ではない。実践を尊ぶ後漢末の儒教の潮流を受けて、儒教を「経世済民」に役立てることを重視する荊州学の学者司馬徳操から、「時務を識る俊傑」と評価され、「臥龍」と推奨された思想家・政治家としての諸葛武侯である。諸葛武侯は同学の者が經典の章句(細かい解釈)に夢中になるのに反して、大まかな意味を知るのに止めていた。

重要なことは、受験勉強のような細かな知識の暗記ではなく、經典の指し示す理想の実現にあると考えていた³⁰。それは丞相としての諸葛武侯の政治的実績を見れば納得がいく。

小楠は「時務を識る俊傑」を「三代」以降に求めると諸葛武侯しかいないと理想の政治家として称賛しているのである。

以上後半四句と(3)(4)の関連について「三代」と関連付けて述べてみた。「三代を期す」というのは小楠にとって自分の身を修め、聖人君子になろうと努力研鑽し、その学んだものを「時務」(実際の政治)に生かすということである。「三代」とはそういう政治が実現された理想社会なのである。しかるに漢代以降、後世の政治家は「功利・権変」に流れ、なかなか「三代」の治教を受け継ぐものがない。その中で当時小楠が選んだ思想家・政治家が中国では諸葛武侯、日本では長門崇文公・上杉鷹山である。

(3)(4)を三寺に託したのは、彼らのように自分は「民を愛し」「身を修め」「三代を期し」て政治を志したい。そのため自分は「之を思い休む能わず 刻苦 寤寐に欽しむ」努力をしているとのメッセージを伝えたいのだと思う。そこで淇水文庫「感懷十首」の中に現在の政治に関する積極的抱負を伝える詩がないので、(3)(4)の内容をまとめ③の詩の後半四句に詠み込み、5の詩と入れ替えたものであろう。

2 5の詩(淇水文庫本)と(1)本庄一郎宛書簡「奉問条々」

では淇水文庫本の5の詩を、小楠がなぜ削ったのであろうか。その理由について考察してみたい。まず5の詩を挙げてみる。

明儒何俗陋	明儒何ぞ俗陋なる
尽失聖学眞	尽く聖学の眞を失う
王氏矯其弊	王氏其の弊を矯め
却於一偏傾	却て一偏に於いて傾く
如賢于俗儒	俗儒より賢なるが如きも
要之失道均	之を要するに道の均しきを失う
君子有大道	君子に大道有り
豈向邪径行	豈に邪徑に向かいて行かんや

この詩は「送池辺熊蔵帰柳川」(『小楠堂詩草』)の「功利に流れず禪に流れず 大丈夫の心聖賢を希う 終生堅苦(注：朱子の遺戒)の力を尽くし得て 雲霧を披いて青天を見んと欲す」の「功利(徂徠学)」「禪(陽明学)」批判にも見えるように、明儒、とりわけ王陽明を批判、朱子学に邁進することを読み込んでいる。このように小楠がしきりに陽明学を批判するのは、一時期陽明学を主として勉強した時期があったことを示している³¹。

時二横井子江府ヨリ帰り、其江府ニ在ル酒後ノ過失ニ因テ官ノ責辭ヲ受ケ七十日禁足ノ戒ニ服シ、門ヲ杜テ書ヲ讀ミ、初メ陽明ノ書ヲ讀ミ直ニ其学ノ偏ナルヲ看破シ、次ニ程朱ノ書ヲ讀テ、其純正ナル、聖人ノ道果シテ茲ニ在リト信ジ、……(元田永孚『還暦之記』)

さて、(1)本庄一郎宛書簡「奉問条々」(嘉永二年八月十日)を見ると、朱子以来、宋・元の儒者、盛大の氣象は乏敷候へ共、大抵師説を守り支離滅裂の病御座無く候。明・清儒者に至り候ては一向に頭腦これなきより、格致の訓を誤り、徒に書を読み其義を講ずるを以て問學と心得候。必竟是大全之陋習にして俗儒無用之学に陥入申候。王陽明此の俗儒の弊を見候て朱子格致之訓此くの如しと心得、良知之説を唱へ別に寂禪異端之幟を立て候より、朱・王之学と二通り相成、此道之大害誠に嘆しき事に御座候。

とある。この書簡は、小楠が久留米の儒官本庄一郎に自分の朱子学にたいする考え方及びその展開(中国・日本)について書き送ったものだが、これを三寺三作に託したのは「純正朱学者」たる最新(嘉永二年)の自分の見解を著したものだからであらう。傍線部で「明・清儒者は俗儒無用の学に陥った。王陽明が俗儒の弊を見て、朱子の格致の訓を誤って良知説を唱えたため、朱・王の学の二通りになったのはなげかわしい」と述べているが、これは5の詩の前六句「明儒何ぞ俗陋なる 尽く聖学の眞を失う 王氏其の弊を矯めんとし 却て一偏に於いて傾く 俗儒より賢なるが如きも 之を要するに道の均しきを失う」とほぼ同様である。

小楠が5の詩を省いたのは、この詩の内容が本庄一郎宛書簡「奉問条々」に述べている内容と全く重なることにより、重複を避けると同時に、マイナスイメージ(批判)が強い5の詩を、積極的・前向きな内容の③の詩に入れ替えたのだと思われる。

ただこの改稿は応急的なものであり、前述したように「書懷は旧作にて道理不行届之処多、改作仕心組にこれ有り候」(嘉永三年五月十三日三寺三作宛小楠の書簡)と、のちに(嘉永五年頃)改稿している。それがテキスト(八)である。

3 詩の順序の変更について

先に述べたように、淇水文庫本と松平文庫本とは詩の入れ替えと同時に、順序も変更されている(三の校勘表参照)。それはなぜか。漢詩の連作は何かの内容上のつながりで並べられるのが通常である。したがって詩(内容)が入れ替えられると順序が変わるのは当然である。実は松平文庫本③の詩は、次にあげる淇水文庫本の9(松平文庫本④)の詩とセットに詠まれている。

幽厲朝綱を失し 王室東方に遷る 何者ぞ此の際に乘じ 邪徑の端を開き成す 既に一世の功を竊みしのみならず 又漢唐の先を為す 古今功利に帰し 管仲の罪天に通ず

(注) ○幽厲—幽王と厲王。ともに周代の暴君。○管仲—春秋時代斉の宰相。産業の振興・富国強兵政策を推進し、斉の桓公を助けて春秋五霸たらしめた。

その説は功利経済を主とする。小楠はこれを覇術と批判する(「沼山閑話」)。

この詩は③の詩の「治教は三代を期し 漢唐の林に列せず」の理由を示している。なぜ「治教は三代を期し 漢唐を見習わない」かということ、「周室が衰えた時、管仲が功利を打ち出し、漢唐への邪徑のさがけとなった」からである。そこで松平文庫本では③④(自己紹介・三代×管仲)とセットにし、自身の読書修養を詠んだ①②と思想を詠んだ⑤⑥⑦⑧の間に置いて連作に内容のつながりを持たせたものだと思われる。

おわりに

小楠は「今日はいかう思ふけれども、明日になったら違ふかも知れない」と現在の考えにこだわらぬ人であった。儒学思想や政治思想、君臣観や西洋観など、勉学を通じ講習討論を通じ、或は状況に応じ、納得すれば(合点すれば)あっさり古い上着を脱ぎ捨て成長していった。それが小楠の大きな魅力

であり、分りにくさであり、誤解された原因でもある。しかし、小楠において早い時期から一貫し、ぶれないで晩年まで追求めた政治指針があった。それが政治は誰のためか—「民のため」、どのように(何を目標・理想に)—「堯舜」三代の治教のように—という二つの指針である。

これを彼自身いつごろいかにして意識し自覚し始めたかについて、「感懷二首」と「感懷十首」を考察することによって論じてみた。

天保十四年作の「感懷二首」第一首では自身の学問修養や仲間たちとの講習討論など実学派の興起の興奮を詠み、第二首では台風・高潮による民の惨状を通して、藩政を批判、「深く知る王業の基 民非ずんば 国何ぞ立たん」これを愛して食衣を饒かにす(十四年後の「沼山閑居雜詩」という「民のため」の政治、執政者たるものの責務を初めて強く自覚した。政策提言書「時務策」とともに、初期小楠の大きな転機を示した詩として注目される。

弘化二年四月の序がある「感懷十首」では、二種のテキスト(淇水文庫本・松平文庫本)間で入れ替わった詩(5と③)に注目し、「感懷十首」とともに三寺三作が嘉永二年小楠のもとから持ち帰った他の四点の著作と比較して、なぜ入れ替えたかの考察を行った。その結果、これらの著作と二詩の間には深い関係があり、雑多に見える五点の著作にはそれぞれ小楠が福井藩の人々に伝えたいメッセージ(自分像・抱負)が託されていることがわかった。

それは「純正朱学者」としての自分(本庄一郎宛書簡「奉問条々」、「感懷十首」)、愛君憂国の肥後藩士としての自分(恭題泰勝公和歌巻後)「感懷十首」③、「三代」を受け継ぎ「時務」を志向する政治家としての自分(「題見聞私記後」「読諸葛武侯伝」「感懷十首」③)であった。

従来の研究では「三代」の語は嘉永五年(一八五二)三月の「学校問答書」に「三代の際道行候時」とあるのが初出とされる。しかし本稿の考察により、小楠が「三代」の語を一つの理想的政治(君主が利にとらわれず、民のため、時宜に即した政治を行う)が行われた時代として具体的目標として意識し始めたのは、天保十四年(一八四三)あたりまでさかのぼれることがわかった。すなわち、天保十四年の「題見聞私記後」にはっきり「三代を期す」とあり、また同時期と思われる「読諸葛武侯伝」で、「三代」は「時務」(その時に実行しなければいけない政治)と関連して使われていることから、

「深く三代之道に達し、明に今日之事情に通じ」（安政三年十二月、越前藩士村田巳三郎宛書簡）の認識（実学）をすでにこの頃持ち始めていたことがわかる。小楠はそのことを二つの著作と「感懷十首」③（嘉永二年）を通して福井藩の人たちに伝えようとしたのであろう。福井藩の人たち（松平春岳も含む）もこれらの著作を読み、純正の朱子学者としての小楠と同時に、実践的政治家としての小楠に期待したのではないか。そのことが安政五年（一八五八）の福井藩招聘の遠因になったのかもしれない。

最後に小楠がなぜこの頃「民のため」「三代の治教」を強く意識し始めたかであるが、これについては従来から熊沢蕃山（『集義和書』）の影響、李退溪を受け継ぐ大塚退野・平野深淵ら熊本実学の流れなどが指摘されている。ここで詳しく論じないが、例えば、前者でいえば「国の本は民也。民の本は食也。民食の事くはしくしらずでは、国郡を治る事あたはず」（『集義和書』）とか「唐虞三代共に基本を明かにする時は一也。其末を事とする時はみな復すべからず。三代以下は道行はざれば、いふにたらず」（『集義和書』）などである。

小楠は『東游小稿』（天保十年）において「議論熱せずして水よりも冷やかに 集義内外の書を読むに似たり」（訪藤田虎之助夜話極適。和虎之助韻）と詠み、早くから蕃山に傾倒しているが、「感懷二首」（天保十四年）の次の詩「偶作二首」（○を施す）でも「憂戚知る天予を玉にせんと欲すと 看來たる集義一条の途」と詠む。小楠は『集義和書』を生涯愛読。『集義和書』は彼の思想形成に大きな影響を与えた。

後者でいえば、例えば「人君は堯舜を以て法則とし給ふべし。堯舜の天下に君たるは民を愛し給ふ外別事なし」（平野深淵「程易夜話」）などである。「感懷十首」に「吾慕う退翁の学 学脈淵源深し」、「本庄一郎宛書簡（嘉永二年）」に「拙藩先儒大塚退野：国を憂へ君を愛するの誠、弥以深切に有之、真儒とも可申人物にて御座候」とあるように、この頃の小楠は大塚退野・平野深淵ら肥後実学の著作を読んで傾倒していたことが知られる。

「感懷」詩が詠まれた時期、小楠は懸命な学問修養（陽明学・朱子学関係など中国の古典、熊沢蕃山・大塚退野・平野深淵らの著作の読書）、中国・日本（他藩・肥後藩）の政治状況の比較、仲間たちとの講習討論などを通して、「民のため」「三代の治教」というゆるがない指針（出発点）を確信・確

立した。それはまだ観念的ではあったが、重要なのは小楠が実際の政治家（諸葛武侯・長門崇文公・上杉鷹山）の治策（時務）とからめて「三代」を用い、「三代を期す」と対外的に表明したことであろう。後になると小楠は『書経』の熟読、西洋社会との比較などにより、「民のため」「三代の治教」の両者を結び付けながら、「三代」を具現化・深化させ、彼独自の政治理念へと展開させていった。

注

- (1) 影印本『小楠堂詩草』（民友社、昭和四年）。なお本稿に用いる詩は漢詩を指す。
- (2) 梁川星巖も「小楠の作は未だ詩の体をなしていない」という趣旨の事を言っている。（山崎正重『横井小楠』上巻伝記篇、明治書院、一九三八年、一〇七四頁。以下『伝記篇』という）小楠も若い頃は熱心に詩作の勉強に励んでいる。時習館時代の『萬館雜誌』（天保九年）に漢詩の構成・韻律などについて論じた文がある。
- (3) 元田東野「贈梁川星巖書」に対する小楠の批評（山崎正重『横井小楠』下巻遺稿篇、明治書院、一九三八年、七七八頁。以下『遺稿篇』という）。
- (4) 小楠は明・清の詩もよく読んでいた。陶淵明や杜甫の詩が好きでたびたび写しているが、結局小楠の詩は小楠の詩である。山崎正重も「何人に私淑したかはその詩風を見てよくわからぬ」という。（『伝記篇』、一〇七四頁）
- (5) 「二首」の文字は「小楠遺稿」（横井時雄編、民友社、明治三十二年）、「遺稿篇」で加えている。「小楠堂詩草」にはない。「感懷十首」と区別するため、本稿では便宜的に「感懷二首」とする。
- (6) 一般に横井小楠や長岡堅物らの研究会グループを実学派・実学党などというが、もとは他からの貶称で、小楠自身「実学」の語はほとんど用いない（安政三年五月十五日立花老岐宛書簡に「格物之実学」がただ一箇所見える）。漢詩には一切使われず、逆に「否泰 惟（こ）れ天にして吾與（あずか）らず 行蔵命有り独り之に安んず 平生の心事誰に向かいて説かん 一に任ず人虚学の児と呼ぶに」（和和田子敏見寄韻、安政五年春頃）と、「虚学（の児）」と称しているのは興味深い。通常朱子学では思想的敵を「虚学」と呼び、自己を「実学」とする。
- (7) 「小楠堂詩草」は、小楠が親しかった海舟に自作の詩集二冊を再編して書き写し、与えたものだと思う。（徳永洋「思いがけない発見 海舟の秘蔵本」、『熊本日日新聞（夕刊・本のページ）』平成十四年五月二十八日）。
- (8) 松浦玲「横井小楠へ増補版『儒学的正義とは何か』、朝日新聞社、二〇〇〇年、五三頁。
- (9) 訳は吉川幸次郎『詩経国風下』（岩波書店、昭和四八年、二六六頁）による。
- (10) 『肥後近世史年表』（日本談義社、昭和三三年、一六三頁）。「熊本藩年表稿」（細川藩政史研究会、一九七四年）、「熊本県災異誌」（熊本県、一九五二年）、「新熊本市史」通史篇第四卷近世Ⅱ（平成十五年、四五八頁）にもこの時の災害の記事がある。
- (11) 「熊本藩年表稿」（細川藩政史研究会、一九七四年）による。
- (12) 『鳴屋日記』、菊池市史編纂委員会、昭和六十二年、六七七頁。

(13) 『肥後近世史年表』一六三頁。『熊本藩年表稿』三二四頁にもある。

(14) 金谷治『孟子』(朝日新聞社、昭和四五年、一一頁)。

(15) 『時務策』の成立時期については天保十二・十三・十四年説がある。少なくとも天保十四年秋以前であることは、『時務策』でこの自然災害に触れていないことである。最近徳永洋が『時務策』にA徳富蘇峰題の『時務策』(旧稿)とB山崎正重発見の『時務策』(改稿)があることを「横井小楠『時務策』考」(『近代の黎明と展開』熊本を中心に)、熊本近代史研究会、二〇〇〇年)及び「横井小楠『時務策』再考」(『横井小楠研究年報』第二号、二〇〇四年)で発表。さらに堤克彦が天保十三年秋説・段階成立説を発表している。(堤克彦「肥後藩士横井平四郎の『時務策』著述の時期について」『天保十三年秋説』の提唱の背景―、熊本県高等学校校地歴・公民科研究会 研究紀要 第三四号、二〇〇四年) A・B両稿の詳しい検証が必要となろうが、私見では現在のところ堤の言うように天保十三年完成説が妥当かと思っている。例えば、天保十二年成立説(鎌田浩「熊本藩の支配機構(三)」、「熊本法学」十九号、一九七二年)が根拠とする「往昔の武田の党民・近來の玖摩の党民凡て聚斂を恨みて事起り」(『時務策B』)は「時務策A」では「往年の武田の党民・近年の玖摩の党民」とある。「玖摩の党民」が天保十二年二月の草山騷動を指すとすれば、「近年」を同じ年の天保十二年とするのは無理がある。「武田の党民」が文化八年(一八一一年)のことなので、「往年」を「往昔」、「近年」を「近來」に改稿したと思われる。また、細川重賢の貨殖の政治を批判した部分は「時務策A」にない。

なお、『時務策』について、山崎益吉「横井小楠と道德哲学―総合大観の行方」(高文堂出版社、平成十五年)に「横井小楠の経済思想―『時務策』の現代的意義」の論考がある。論文では西岡幹雄「初期横井小楠の政策思想と『時務策』」(『経済学論叢』第五二巻第三号、二〇〇一年)がある。

(16) 『遺稿篇』六九頁。
その後、小楠は節儉策に限界を感じ、「書経」などの勉強により、積極的な交易策を提案していく。

(18) 山崎正重「伝記篇」三六一頁。横井家文書「横井先生詩集」にも収録。山崎は「元田の評も付し、人口に膾炙している」ので、小楠の意に反するかも知れぬが、原詩のままあげる」と述べる。

(19) 小楠は一貫して為政者が為政者としての公的責任を全うするには、民を豊かにすることを第一義として政策を立案することにあるという信念をいだき、それを実行した。(源了圓「横井小楠の公をめぐる思想とその『開国』観」、「アジア文化研究」二十七号、二〇〇一年、二六頁)

(20) 水俣市立蘇峰記念館には洪水文庫所蔵「横井小楠先生語録見聞録及手簡」、福井県立図書館には松平文庫中の『機密録』の閲覧の便をいただいた。

(21) 三寺三作が福井に小楠の著作を持ち帰ったいきさつ、及びこれから五点の考察については松浦玲「横井小楠へ増補版『儒学的正義とは何か』(朝日新聞社、二〇〇〇年)の五九頁・六八頁及び注4・6・7に詳しい。松平文庫の「感懐」の存在など本稿の論考はこれに負うことが大きい。

(22) 小楠の君臣観は『時務策』での細川重賢評価の敬慕より批判への転換から、「南朝史稿」の執筆などを通して、「君主がダメなまままで下のものが努力しても国は治まらない」という考え(松浦玲「前掲書」八二頁)に変化していく。

(23) 『東游小稿』の「臘月念五日藤田子登招飲。列藩諸友在坐、賦七古一篇述志。痛加切礎是所願望」(『遺稿篇』八六四頁)。

(24) ③の詩の「治教は三代を期し」と同様の表現は、「国是三論」(万延年)に「治教は三代に法るべき事にて、三代は大聖上に在り、大賢下に居て教を敷故に学校の設けも治道を補て人材を出すに足れり。今の君臣才徳たとへ三代に及ばずとも、治教は三代を以てするの外なければ」(『遺稿篇』五六頁)などある。

(25) 「題見聞私記後」については松浦玲「前掲書」四〇頁参照。また平石直昭「横井小楠研究ノート―思想形成に関する事実分析を中心に」(『社会科学研究』第二四巻第五・六合併号、昭和四八年)にも「最初の思想的変容」として、この時期の小楠を考察し、「帰国後の小楠は『時務策』に結晶されているように、各藩治世の歴史的・比較的研究に取り組んでいたと思われる」と述べている(一九四頁)。

(26) 弘化三年の「聖学問答」(『遺稿篇』九四四頁)に「聖学之第一義は立志に之有り候」とある。小楠は「立志」を「本領を立つ」「本領の合点」などとも言う。

(27) 徳永洋「横井小楠『時務策』考」(『近代の黎明と展開』熊本を中心に)、熊本近代史研究会、二〇〇〇年)に収録の徳富蘇峰題「時務策」(二九頁)。上杉鷹山について、小楠は天保九年「寓館雑誌」でも称賛している。

(28) 『遺稿篇』六〇八頁。『遺稿篇』は年代不明とするが、平石直昭は弘化二年七月朔日と推定する。「前掲論文」二〇七頁。

(29) ここで述べる一日夜刻苦、修己治人、賢人聖人を期すは「感懐」詩でも繰り返し詠まれている。また、同時期の『時務策』の命名は、この文と関係があるかもしれない。時務策は本来応試の文のこと。会沢正志斎らにも「時務策」がある。

(30) 荊州学と司馬微・諸葛孔明との関係については、渡邊義浩「三国時代の歴史的位置―思想史的観点から」(『月刊しにか』二〇〇二年七月号、八三頁)を参照した。

(31) 小楠は実際には陽明学の影響を強く受けている。「小楠自身は陽明学は偏であるからこれを捨てて朱子学に入ったと言っているが、彼の思想を見ると、心の重視、惻怛を基本とする人間理解、敬より誠を重んずる考え方、良心の存在の強調、等、心法の工夫の側面に関して陽明学から学ぶところ大である」(源了圓「横井小楠の『公』をめぐる思想とその『開国』観」、「アジア文化研究」二七号、二〇〇一年、三八頁)。

(32) 小楠を評した勝海舟の言葉。(『勝海舟全集』二十一「氷川清話」、講談社、昭和四十八年、五九頁)

(33) 花立三郎は次のように述べる。「小楠の本質は、『深く三代之道に達し、明に今日之事情に通じ』(安政三年十二月、越前藩士村田巳三郎にあてた小楠の手紙の一部、小楠四十七歳)という言葉にあると私は思っている。しかし、私は海舟のいうとおりの『一個の定見』のない人であつたろうかと思う。小楠は『今日之事情に通じ』るだけをいっているのではなく、そのまえにはつきりと堯舜『三代之道に深く達し』といっているのである。これが小楠の『一個の定見』である。彼は、『明に今日之事情に通じ』ていたために時代離れのした、こちの道学者にならず、『深く三代之道に達し』ていたために取り留めのない定見のない人たるをまぬかれたのである。この小楠の示す人物像は、経世家・執政家の理想像ではないだろうか。」(横井小楠のすべて、新人物往来社、一九九八年、一八頁)

(34) 源了圓「横井小楠における天の觀念とキリスト教」(『アジア文化研究』別冊十一、二〇〇二年、一三五頁)。しかし漢文作品で見ると、「三代」の語は漢詩集「東游小稿」(天保十年(一八三九)の「臘月念五日藤田子登招飲。列藩諸友在坐。賦七古一篇述志。痛加切礎是所願望」に、「上自三代下明清 及我皇朝治乱述(上は三代自り下は明清 我が皇朝の治乱の迹(あと)に及ぶまで)」とあるのが初出であろう。ただこれは単に「三代から明清」という朝代を述べただけである。

(35)

小楠思想の骨格は蕃山(『集義和書』)により形成されたといつて過言ではない。その後も「日本の書にては熊沢の集義和書は格別に相見申候」(嘉永四年越前藩士岡田準介宛書簡)と評価し、福井藩の顧問に就任してからは、テキストとして講習をした。士道忘却事件で帰熊後、そのことを「蕃山の額を掲げ出だし 長く越老の賓と為る」(『小楠堂詩草』「静軒見和。又置其韻及東都旧事」と詠む。またアメリカに留学中の二人の甥にも慶応三年六月二十六日書簡で「西洋列国利の一途に馳せ一切義理これ無く、就ては二典三謨熊沢書弥信仰之段甚以て大慶を致し候。此許にても夫のみ講習に及び候」と『書経』『熊沢書(集義書)』が基本文献だと強調する。小楠の蕃山への傾倒ぶりがわかる。「その時々々の政治問題に関連させながら読んだもの」と想像される。(北野雄士「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読―誠意の工夫論を巡って―」、『横井小楠研究年報』第2号、全国横井小楠研究会、二〇〇四年、七頁)

(36)

「拙藩中真儒と称するは退野・平野兩人にて御座候」(嘉永四年十月朔日吉田悌蔵宛書簡)ともいう。熊本実学については楠本正継「大塚退野並びに其学派の思想―熊本実学思想の研究―」(九州儒学思想の研究、一九五七年)、北野雄士「大塚退野、平野深淵、横井小楠―近世熊本における「実学」の系譜―」(大阪産業大学論集)人文科学編、一〇七号、二〇〇二年)参照。

(37)

天保十四年(嘉永二年)頃の小楠の「三代」の認識は本文で述べたように「君主が利にとらわれず、民のため、時宜に即した政治を行った時代」というものである。儒家なら誰でも「堯舜三代の時代は理想的な政治が行われ、平和な時代であった」という尚古思想を持っている(特に徂徠学派など)。その意味で、この頃の小楠の「三代」の認識はこれと大きくは変わらない。ただ「時務」を強調し、「三代」を本気で求めていくところが小楠の特徴である。以降、小楠は「三代」の具体的内容を模索(『沼山閑居雜詩』など)、特に福井藩に招聘されてから嘉永二年のメッセージ(「三代を期す」)通り、実際の施策(「国是三論」など。詩に「読二典」)に生かしていった。

小楠における「三代」の思想展開に関しては多くの論考があるが、源了圓「横井小楠の『三代の学』における基本的概念の検討」(『アジア文化研究』別冊二、国際基督教大学、一九九〇年)が基本文献である。